

浮気妻の制裁

第十四卷 主婦達の復讐

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 若妻の集団陵辱

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「浮気妻の制裁 第十四巻 主婦達の復讐」
（以下本書と表記する）の著作権は「海老沢
薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、
及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し

た場合を除き、本書の一部、または全部を、

あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファ

イル、ビデオ、テープレコーダー）により複

製、流用、転載、転売することを固く禁じま

す。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第

619条などの罰則がありますのでご注意ください

い。

■ まえがき

マンションの管理人室で開かれた住人の主婦達による緊急集会では、淫らな若妻、萌々を辱めるための様々な調教方法が決定する事になった。

一糸纏わぬ姿で立たされたまま、それらの決定事項を屈辱に耐えながら聞いていた萌々は、これから生活に漠然とした不安を覚え、これからはいられなかった。

やがて、集会を終えた隣家の主婦、麻子達も萌々を緊縛放置したまま管理人室を出て行く、それぞれの部屋へと帰ってしまふ。

マンション管理人と二人きりになった萌々は仕方なく管理人に救いを求め、両手を縛るロープを解いて欲しいと懇願するが・・・。

六十代の男性管理人に脅迫され、全裸大股開き姿を晒し羞恥に喘ぐ萌々。圧倒的に優位な立場にいる管理人は若妻の裸身を隅々まで舐め回すように見つめながら、次々と屈辱の要求を突き付ける。

萌々は大股開きの恰好で引きつった笑みを浮かべ、さらには腰を浮かして秘部を見せつけるようなポーズまでとられる。この写真の命令に背くようなマネをすれば、この写真をアンタの主人に見せてやるから覚悟しな」若妻の痴態を何枚もスマホで撮影し満足そうな表情を浮かべるマンション管理人。そうして、哀れな若妻は大きな代償と引き換えにどうか両手の緊縛を解いてももらえたのだが、三階の自分の部屋に戻るためには素っ裸で白昼のマンション内を歩かなければならなかった。管理人室を追い出された萌々は他の住人に見つからないかドキドキしながら、生まれたままの姿で白昼のマンション内を歩き、非常階段を駆け昇って自宅のある三階へと何とか辿り着いた。しかし、ようやく部屋の前に戻ってきた萌々に思わぬ事態が襲い掛かる。なんと鍵を

開けてきたはずの部屋の扉が締まっております、
中に入る事ができなかったのだ。
素っ裸でマンションの廊下に締め出された
形になった萌々は途方に暮れ、新たな羞恥地
獄の始まりを予感するのだった。

■ 第一章 若妻の集団陵辱

昼下がりの管理人室で絶頂した若妻、萌々の姿を、麻子をはじめとするご近所の主婦達は意味深な笑みを浮かべながら眺めていた。若妻の絶頂シーンは何度見ても飽きることなく、麻子達の目を大いに楽しませ、興奮をもたらした。

「ここまで淫乱だと徹底的に調教しないとダメねえ」

「これはイジメ甲斐がありそうだわ」

「いつそマンション中の奴隷にしたらどうかしら」

麻子達はイキ果てた若妻の姿を眺めながらそれぞれ感想を漏らし合った。

程なくして、快感の余韻から覚めた萌々は全員の視線が自分に向けられている事に気づく。と、激しい羞恥に襲われた。

「ああん、もうイヤあん」

萌々は未だ秘部の奥で蠢くバイブにいい加減

うんざりし、絶望的な喘ぎ声を漏らした。
「萌々ちゃん、私たちがアナタのために真面目な会議をしているのに、変な声を出さないでよ」
「そんなに私たちに自慢の体を見られて嬉しいの？」
「これ以上そこでイッたら、もつと厳しい罰を与えるから覚悟しなさい！」
麻子達はそう言つて絶頂したばかりの若妻を責め立てた。
「ああん、ごめんなさい・・・」
萌々は激しい羞恥に項垂れ、謝るだけで精一杯だった。
麻子達はそんな若妻の姿を視界の隅に捉えながら、管理人室の中で再び会議を続けた。
「それでは他に何か良い調教方法はないかしら？」
麻子が他のご近所の主婦達に問い掛けると、さらに驚くべき提案が次々と飛び出した。
「いっそのこのマンションの住人全員で順番に

調教するっていうのはどうかしら」
「それ面白そうじゃない。これからマンション
ンの中にいる時はいつも素っ裸でいさせれば
いいわ」
「それで各家に裸で掃除に回ってもらえば良
いわね」
ご近所の主婦達のあまりにも恐ろしい提案を
聞いた萌々は、思わず快感を忘れ背筋を凍り
付かせた。
「よし決まり！それじゃあ今後マンションの
他の住人の皆さんにも協力してもらって、白
石さんを住人全員で調教することにしましよ
議長役の麻子がそう告げると、萌々は思わず
軽い目眩を覚えた。
そうして、管理人室では麻子達による会議
が続く、その間、秘部にバイブが埋まったま
まの萌々は幾度となく果てることになった。
「ああん、お願いもう許して・・・イクつい
クっイクっイクううう」
若妻の断末魔の喘ぎ声が管理人室に響き渡る

度に、麻子達は会議を一時中断し、その絶頂の瞬間を面白そうに見届けた。
それから、昼下がりの管理人室で行われた主婦達の緊急集会では、若妻に対する過激な調教案が幾つも決定し、麻子達は早速それらを執行する事にしたのだった。
「萌々ちゃん、今夜から私たちが交代でアナタの全裸散歩に付き合ってあげるから、十二時になったら裸で家から出てきなさい！」
麻子は、快感の余韻に浸り恍惚とした表情を浮かべる萌々に対してそう告げると、他の主婦達を連れて管理人室から颯爽と引き上げていった。
萌々は両手を体の後ろできつく縛られたまま管理人と二人きりになってしまい、その美しくも卑猥な裸身を管理人に舐め回すように見つめられることになった。
「ああん、管理人さん・・・お願いですから両手を解いてももらえませんか・・・ああん萌々は未だ秘部の奥で振動するバイブに耐え

ながら、管理人に縋るような目を向け懇願した。
「それじゃあ、ちよつと写真を撮らせてもら
うからそこに座りな」
管理人はそう言つて、床を指差しポケットか
らスマホを取り出した。
「ああん、いやあん・・」
命じられるまま床に座つた萌々は管理人が構
えるスマホから顔を逸らし、脚を固く閉じて
少しでも写真に写らないようにもがいた。
「ちゃんとかつちを向くんだ！それから両脚
を左右に広げろ！言う事きけないなら解いて
やらないぞ！」
管理人は急に声を荒げ、若妻を恫喝した。
「ああん、ごめんなさい・・」
萌々は管理人の物凄い剣幕に恐れおののき、
慌てて謝ると、もう一度管理人が構えるスマ
ホのレンズに顔を向け、両脚をゆつくりと左
右に開いていった。
「せっかくだからそのまま笑うんだ！」

管理人が有無を言わせぬ口調でそう命じると、
萌々は仕方なく引きつった笑みを浮かべてい
った。
「そのまま腰を少し浮かせるんだ！」
自分の意のままに痴態を晒す若妻の姿を見て
調子に乗った管理人はさらなる屈辱のポーズ
を要求し、萌々は羞恥に下半身を震わせなが
ら大股開きの体勢で腰を浮かせていった。
「ああん、恥ずかしい・・・」
萌々はあまりにも屈辱的な姿に喘ぎ、思わず
笑顔を崩してしまった。
「コラ、ちゃんと笑顔を浮かべるんだ！」
管理人が叱責すると、萌々は仕方なくもう一
度引きつった笑みを浮かべて見せたが、秘部
をどうぞ良く見てくださいと言わんばかりの
卑猥なポーズが、萌々には恥ずかしくて堪ら
ず広げた両脚がガクガクと震えていた。
管理人はそんな若妻の姿を何枚も撮影する
と満足そうな表情を浮かべ、スマホに保存さ
れた画像を確認した。

「これだけあれば十分だな。これからもし私の命令に背くようなマネをすれば、この写真をアンタの主人に見せてやるから覚悟しな」管理人がそう脅迫すると、萌々は堪らず笑顔を崩し、どうしようもない不安と恐怖に怯えた。
もはや、萌々にとって自宅のあるこのマンションは底なしの羞恥地獄と化し、何処にも安らげる場所などないように思えた。
「ああん」
萌々が途轍もない絶望感に苛まれていると、管理人が背後に回り腕の縛りを解き始めた。
「解いてやったぞ」
管理人があつという間に両手を縛り上げていたロープを解くと、萌々は少しだけホッとした表情を浮かべた。
「ありがとうございます」
小さな声で御礼を伝えた萌々は、開いていた両脚を慌てて閉じ、秘部に埋まったバイブを取り出した。

まだ振動し続けていたパイプがようやく秘
 部から外れ、長時間に渡る快感地獄からよう
 やく解放されることになった萌々。しかしま
 だ不安材料は残っていた。それは、このまま
 一糸纏わぬ姿で三階の自分の部屋まで戻らな
 ければいけないという事であった。
 もしも、麻子達以外の住人に素っ裸で廊下
 を歩いているところを見つかったらと思うと
 萌々はとても生きた心地がしなかった。
 「あ・・・何か体を隠せるモノを貸して頂
 けませんか？」
 萌々は恐る恐る管理人に尋ねた。
 「そんなモノはない！それより用が済んだな
 らサッサと出て行ってくれ！」
 管理人は再び声を荒げて若妻を一喝した。
 「ご、ごめんなさい・・・」
 萌々はこれ以上管理人に頼んでも無理だと諦
 め、仕方なく素っ裸のまま自宅へ戻ることに
 した。

管理人室の扉を開け、一階の共用廊下へと

出た萌々は、辺りの様子を慎重に伺いながら廊下を歩いた。日中のマンションの廊下を素っ裸で歩くのは何度経験してもとても慣れるものではなく、その脚元はずっとガクガク震えていた。どうか一階の非常階段の扉の前まで辿り着いた萌々は、急いでその扉を開けて階段の踊り場の方に駆け込んだ。これで何とか三階まで誰にも見つからずに行けるはずで、萌々は豊満な乳房を揺らしながら階段を一気に駆け上っていった。

そうして三階の踊り場に辿り着いた萌々は一度そこで息を整えてから、ゆつくりと非常階段の扉を開いていった。さつき麻子達に裸のまま連れ出されてから一時間ほどしか経っていないのに、萌々にはとても長い時間が過ぎてたように感じられた。

三階の廊下に一步踏み出した萌々は、他の住人に見つかからないかどうかドキドキしながら自分の部屋の方へ向かって廊下を歩いた。幸い、

誰にも見つからずに何とか自分の部屋の前に
辿り着いた萌々は、少しホッとした様子で扉
に手を伸ばした。
「えっ・・」
扉を開けようとした萌々は思わず驚きの声を
漏らした。
なぜなら、開けてきたはずの扉の鍵が閉ま
っており、開けることができなかったのだ。
焦った萌々はそれから何度も扉を開けようと
したが、やはり鍵が掛かっているのか扉は全
く開けなかったのだった。

■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>